

調	査
報	告

## 架橋離島と小規模離島のいま②

広島県呉市の島々（後篇）

前号に引き続き、本財団が令和五年七月一〇日から一三日にかけて実施した広島県呉市の島々（小規模離島および架橋島）の調査結果を報告する。本稿（後篇）では、本土との架橋後、離島振興法に基づく離島指定解除となった下蒲刈島（二二八八人、令和二年国勢調査・かまがし）上蒲刈島（二四三三人・豊島（九二一人）とよしま）大崎下島（二七四八人）の現状について概括する（前二島が七月一日、後二島が一二日時点）。

### 下蒲刈島・上蒲刈島

— 安芸灘とびしま海道の玄関口

農業の継承と島内観光の推進

安芸灘大橋は、平成一二年一月に開

通した呉市本土と下蒲刈島を結ぶ有料橋（車両の通行のみ。歩行者は無料）である。下蒲刈島と上蒲刈島の間は、昭和五四年に蒲刈大橋により結ばれていたため、安芸灘大橋の供用開始により、両島は平成一三年三月末日をもって、離島振興法に基づく離島振興対策実施地域の指定を解除されている。

安芸灘とびしま海道の玄関口である下蒲刈島は、下島・三之瀬・大地蔵の三集落からなる。中心部である三之瀬地区は、離島振興事業なども活用した「ガーデンアイランド構想（全島庭園化）」により整備された、石畳の県道と住民の手により植樹された松が立ち並び、独特な景観を有している。この島では、柑橘栽培を主体とする農業や漁業が営まれているが、ともに小規模兼



本誌編集部

業が多く、専業で生計を維持している生産者は少ない。呉市下蒲刈市民センターの黒神千恵センター長によると「農業、漁業とも担い手不足は深刻だ。ただ、最近是比较的若いUターン者が入ってきており、カフェを併設したブルーベリーの観光農園設立などの動きもみられる。一方で、地元の漁業者の中には、ワカメ養殖に切り替えたり、



黒神千恵下蒲刈市民センター長。

バナメイエビの屋内養殖を事業化するなどの新たな取り組みも出てきている」という。安芸灘大橋開通後、島外からの集客を担ってきたのは、蘭島閣（らんとうかく）美術館や松濤園（しょうとうえん）を中心とした文化施設群やキャンプ場などである。コロナ禍を経て、「梶ヶ浜海水浴場にコワーキングスペースが設けられ、民間のグランピング施設が営業を始めた。安芸灘諸島

島の玄関口として、さまざまなか形で新たな時代のニーズをキャッチアップできるかが今後の鍵となる」と、黒神センター長は強調する。

七国見山（四五メートル）を中心に東西に長い地形の上蒲刈島は、大浦・田戸・宮盛・向の四集落からなる。隣の蒲刈島と同様に柑橘栽培を主体とする農業が営まれており、特にスモモの生産は、県内生産量の五割以上を占め県下一

下蒲刈島・上蒲刈島・豊島・大崎下島に関する年表

昭和54年10月	蒲刈大橋開通（下蒲刈島↔上蒲刈島）
平成4年11月	豊浜大橋開通（豊島↔大崎下島）
7年8月	平羅橋開通（大崎下島↔平羅島、岡村大橋開通（中ノ島↔岡村島））
10年10月	中の瀬戸大橋開通（平羅島↔中ノ島）
12年1月	安芸灘大橋開通（呉市本土↔下蒲刈島、車の通行は有料）
13年4月	下蒲刈島・上蒲刈島が離島振興法に基づく離島指定解除
15年4月	下蒲刈町が呉市に編入
17年3月	蒲刈町・豊浜町・豊町が呉市に編入
20年11月	豊島大橋開通（上蒲刈島↔豊島）
22年4月	豊島・大崎下島・岡村島（愛媛県）が離島振興法に基づく離島指定解除

位を誇る。一本釣りや刺し網、タコツボ漁などの漁業もみられるが従事者の高齢化や漁獲量の減少により、後継者不足が課題となっている。このほか「日本の水浴場五五選」や「日本の快水浴場百選」に選定された「県民の浜」には、宿泊・研修施設や天体観測館、古代製塩遺跡復元展示館、スポーツ施設



狭間泰成蒲川市民センター長(奥)と國實 陵副センター長。

などが整備されており、自然体験レクリエーションの拠点として、修学旅行生をはじめ多くの観光客が訪れている。呉市蒲川市民センターの狭間泰成センター長は「近年、ツーリングやロードバイクで訪れる観光客が増加している。コロナ禍であっても市内や近隣からの

来島者は多く、スポーツイベントも開催されている。光ファイバが整備されたので、県民の浜でのワーケーションやサテライトオフィスの誘致による移住定住などの展開につなげていきたい」と話した。

#### 地域コミュニティの維持を

架橋により本土との常時交通が確保されたことのメリットとして、両島から共通してあげられたのは「船の運航に左右されない往来が可能」となった点である。特に消防や救急などの緊急事案に対し、広域的に対応できることになった利点が大きいという。

一方、いつでも帰って来られるようになったことで若い世代を中心に転出が増加。下蒲刈島のケースでは、架橋前(平成二年〜七年)には八パーセントほどだった五年ごとの人口減少率が、架橋後(平成一二年〜令和四年)は一三〜一四パーセントまで拡大している。黒

神下蒲川市民センター長は「それまでの若者の転出傾向や少子高齢化に、学校の統廃合や医療施設の縮小が拍車をかけたのではないかと推測する。また、地域コミュニティの維持という点では、「船で通勤・通学していた時は、港が地元の人々の交流の場になっていたが、車がメインになったので、コミュニティが疎遠になってきている。その課題を、行政を含め地域全体で解決していく必要がある」と話す。これは上蒲刈島でも同様で、狭間蒲川市民センター長は「人口減少や高齢化が進み自治会組織の維持や地域行事、イベントの実施が困難になってきている。加えて、空き家やゴミのポイ捨て、不審者が増えた」と、島の景観保全や防犯面についても課題としてあげた。加えて、買い物などを本土側で行なうようになったため、それまで島内にあったスーパーや商店の閉店なども起こっている。

下蒲刈島も上蒲刈島も就業人口のか  
なりの割合が本土側へ通勤していると  
いう。また、呉市街の大きな病院や学  
校へ通院・通学する住民も多い。そこ  
でネックになっているのが、安芸灘大  
橋の通行料と車を運転することのでき  
ない交通弱者への対応である。前者に  
ついては、現在、普通自動車の通行料  
は一回当たり七三〇円だが、百回分の  
通行券綴りが一冊三万一千四二〇円で販  
売されている。呉市では、安芸灘地域  
の住民で、出産予定者や二九歳以下の  
若者がいる世帯に対し、一冊当たり一  
万円で購入助成（該当者一人目につい  
ては、年三冊まで助成。二人目以降は一冊ずつ  
追加）を行ない、住民生活を支援して  
いるが、住民からの通行料無料化の要  
望は大きい。後者については、安芸灘  
地域と本土を結ぶ路線バスを運行し、  
「敬老いきいきパス（七〇歳以上）」の交  
付を受けていけば一乗車一〇〇〇円で利  
用できるものの、路線経路などの制約

もあり、島内を巡る生活バスを含めて  
改善が求められている。

### 豊島・大崎下島

——架橋により生活圏が変化

地場産業の活性化と移住者の受け入れ

上蒲刈島の東側に位置するのが豊島  
と大崎下島である。この二島は、

平成四年一一月に豊浜大橋で結  
ばれ、さらに同二〇年一一月に  
豊島く上蒲刈島間の豊島大橋が  
開通したことで、安芸灘大橋を  
経由して本土との常時交通が確  
保されたため、同二二年三月末  
日をもって離島振興対策実施地  
域の指定を解除された（大崎下島  
とつながる愛媛県今治市岡村島も同  
時期に指定解除）。

豊島は、高雄山（三一七メート  
ル）を中心にお椀のような形を  
しており、島の東側に集落が集

中している。県内屈指の漁業の島とし  
て栄え、特に近海で獲れるタチウオは、  
令和元年に「豊島タチウオ」としてG  
I（地理的表示保護制度）に登録されるほ  
どの高品質を誇る。しかし、近年は漁  
獲量が減少、若い就業希望者もいたが、  
不漁のため従事できなかつたという。  
呉市豊浜市民センターの竹内和穂<sup>かずほ</sup>セン



竹内和穂豊浜市民センター長。



大亀征則豊市民センター長。

ター長は「ヒジキやレモンなどの半農半漁の生産で収入の生計の維持を図る漁師もいる」と話す。また、島の西側ではミカンなどの柑橘栽培が行なわれているが、イノシシなどの獣害被害に悩まされている。呉市内でも高齢化率の高い豊島では、高齢者の健康維持も課題の一つ。竹内センター長は「光フ

アイバが整備されたので、まずは豊島から船でしか行くことのできない齋島いはいしまの集会所などでリモート診療を行なえるようにしたい。定年後に島に帰ってくる方も出てきている」と語った。

風待ち・潮待ちの港として栄えた御手洗たらいの街並み（重要伝統的建造物群保存地区）で知られ、最近ではアカデミー賞で国際長編映画賞を受賞した映画『ドライブ・マイ・カー』のロケ地としても脚光を浴びた大崎下島。地形は急峻だが、その斜面を利用したミカン栽培が盛んで、「大長ミカンおおながみかん」はトップブランドとなっている。また平成二一年には「大長レモン」も商標登録、県内でも有数のレモン生産量を誇る。呉市民センターの大亀征則センター長は「豊町の産業はミカンとレモンでもっている状態。減農薬のレモン栽培など付加価値化の取り組みもみられる。ほかに基幹産業がなく、働き場がないのが課題」だと話す。しかしながら、御

手洗地区や久比地区くひを中心に若いUターン者が宿や食堂、介護事業所の運営などに取り組む事例も生まれはじめているという。「移住希望者がいても空き家が少ない。空き家バンクに登録するとすぐになくなる状態」と、大亀センター長は地元側の受け入れ態勢の課題を口にした。

#### 安芸灘大橋は生活道路

豊島と大崎下島でも、架橋の大きなメリットとしてあげられたのは、前述の二島と同じく船の時間を気にすることのない往来が可能となった点である。大亀豊市民センター長は「船だけだと生活の幅が狭められていたので、早く橋が掛かってほしいと願っていた。いまは二四時間いつでも帰れるのでありがたい」と話す。

最近、御手洗地区を中心にサイクリストやフランスなどのクルーズ船の観光客が増えており、市民センターの職

員や地域おこし協力隊などもガイドを務め、島内を案内しているという。令和五年四月に光ファイバが整備されたことをチャンスととらえ、今後、さらなる来島者の獲得を図る。

両島における架橋後の大きな変化は、生活圏が竹原や今治から呉へ移ったことだろう。「かつて住民の生活圏は、船で結ばれていた地域だった。橋が架かり航路が廃止や減便となったことで、それが呉へと変わった。いまでは通勤や通院、買い物などを呉に求める人が大半。島内の店も減少した（大亀豊市民センター長）」という。住民からは「いまや安芸灘大橋は生活道路なのだから、無料にすべき」との声が大きい。また、本土までの距離が遠いことも課題としてあげられた。竹内豊浜市民センター長は「路線バスの利用者は高齢者が多い。本土まで長距離・長時間の乗車となりトイレに行けず困っている」と指摘した。

## 地域の実情に即した柔軟な対応を

以上、呉市に属する安芸灘の架橋島について紹介してきた。しかし、じつはとびしま海道の終着地は大崎下島と無人島を介してつながる今治市の岡村島である。同市関前支所（せきま）の担当者や同島の住民によると、平成二二年の指定解除から、人口が半減しているという。架橋後、航路の減便などがなされ経済圏が呉へ移り、通勤や通院、買い物などで安芸灘大橋を利用する住民が増えているが、自治体が異なる（呉市ではない）ため通行支援などが受けられない。このほか、車の運転ができない人の移動も課題になっており、本土行き路線バスを利用するためには隣の大崎下島まで出なければならず、呉市のように高齢者の乗車賃低廉措置もない。

呉市の四島も岡村島も常時交通の確保に対する評価は総じて高いが、それ

がそのまま該地域にとってプラスにつながっているわけではないようだ。学校や診療所の統廃合などによる人口減や少子高齢化の加速、経済圏の変化による地元商店の閉店・撤退などは、中長期的な視野に立ってはおぼろげに把握可能な架橋の影響だろう。現行の離島振興法において「離島と本土等の間の架橋が整備された際には、当該地域の実情に配慮しつつ、離島振興対策実施地域の指定が直ちに解除されることのないよう同地域の指定解除基準についても検討すること」が附帯決議されている。現在、（基本的に）架橋の次年度に限り準備にあてるため指定解除の猶予がなされているが、架橋の影響が離島に表れはじめる時期やその度合いなどを過去の事例から検討することで、猶予期間の延長など地域の実情に即した柔軟な対応も必要ではないだろうか。

（小山田・森田）